
Destiny Gate

エア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e s t i n y G a t e

【Nコード】

N 9 5 0 2 C

【作者名】

エア

【あらすじ】

公園で出会った謎の爺さんの予言どおり死んでしまった神谷慶。ところで皆さんは死んだ後どこに逝くと思いますか？天国？地獄？まあ普通の人はそうだけど彼の場合は少し違った。彼が向かったその先は3番目の選択肢その名は” D E S T I N Y ・ G A T E ”

第1話：前夜

学校中に今日最後の授業終了の鐘の音が鳴り響く。

大抵の生徒は帰り支度をすませ担任が来るまでの短い間を友達と多和いもない話しをしているものだが、ここに一人の例外がいる。

神谷 慶。彼は一人本来は立入禁止の屋上で寝転がっていた。秋空を流れる雲をぼーっと見ながら一つ、大きな欠伸をかくと

「超ネムい・・・」

と、一言呟いてそのまま寝てしまった。

数時間した後、あまりの寒さに眼が覚めた。眠気眼で起き上がり辺りを見回せば、すっかり日も暮れた秋の夜。全ての部活が活動を終え、僅かに明かりが着いているのは用務室だけだった。

慶はおもむろにポッケから携帯を取り出すと、そこに表示された時間を見て驚くと共にダッシュで家路へとついた。

現在の時刻は夜の7時53分。

「後、7分・・・」

慶は全速力で走り続けていた。慶がこんなにも急いでいるのは、慶の家には厳守すべき規則があるからだ。

それは門限は例え、男子であろうと夜8時までというものだ。これを破れば空手師範の親父、神谷 陣八の制裁が待っている。

過去三回。それは今までに慶が地獄を見た回数。それを思い出しただけで全速力で走り続け、ほてった体にも寒気が走った。

しばらくして、慶の眼の前にここら辺では一番大きい公園の入口が

見えてきた。この時点で残り時間は後4分、このままでは1分遅れてしまう。

しかし今眼の前にある公園を突っ切れば後3分で家に着くことができる。普通なら迷わず突っ切るが、慶は入口の前で立ち止まった。

北上台公園。

それがこの公園の名称である。

昼間は子供連れの母親達の社交場であり、園内に植えられた様々な木や花が季節を彩るごく普通の公園だが、一度夜になると話は変わる。

不良のたまり場となり今の不景気なご時世だと、首吊り自殺を謀る者や幽霊を見たあの通れば何かに絡まれること間違いなし、黒い噂が絶えない公園である。

今、慶の中では天秤がフラフラと揺れながらどちらがより重いか決めかねている状態だ。

公園を通るか、親父の鉄拳を喰らうか、

数秒考えると一つの結論が出た。

覚悟を決めた慶は全速力で公園の中へと入って行く。

できれば何も見ないように下を向きながら走る慶、広い敷地と生い茂る木々が外界との接触を無くし、一種の無法地帯とも言えるこの公園。

100メートル程走ると少し先の方で、慶が通る予定の道の端で一人の老人が3人の若者に暴行を受けているのが見えてきた。

老人は薄汚れた赤いニット帽を被ったいわゆるホームレスのようだった。

（うわゝ嫌なもん見ちったよ）

このまま走り抜けたいところだが、またしても頭の中で天秤がユラユラと揺れ始めた。

追い払おうと思えばやれないことはない。親父が空手の師範だけに慶自体の強さも中々のもの。

しかし老人を助ければ空手師範の制裁が、迷う慶。老人はもう眼の前に迫っている。

（オレには、関係ない・・・）

そう思つて老人の前を駆け抜けようとした時、一瞬、老人と慶の眼が合った。

慶は走るのを止めた。

「まったく、損な性格だぜ、」

自分の性根が思ったより腐つてなかった事にやれやれと思いながら、慶の眼に力が宿る。

「おい、アンタ達いい加減にしたら？」

「は？」

慶の呼びかけに三人組は暴行を止め、新しいオモチャでも見つけたような顔で慶の元へと歩みよってきた。

「なにオマエ？正義のヒーローのつもり？そんな真剣な顔しちやつてさバカじゃないの？」

「そんだけやれば充分だろ」

「なに言つてんの、まだまだ遊びたんねえよ。なんならお前とも遊んで上げよう・・・か！」

三人組の一人の拳が慶目掛けて飛んでくる。

「ヒヤハッ!!」

他の二人はその様子を笑いながら見ていたが、二人の期待に反して男の拳は慶の顔面に届くまえに簡単にいなされ代わりに慶の拳が相手の腹に深々と突き刺さっていた。

「ぐわっ・・・!?」

相手は慶の技の速さに何が起こったかもわからないと言った顔で腹を抑え、苦しみながら慶を見上げていた。

「早く帰れ、これ以上やられなくなかったら・・・」

慶に睨まれ、他の二人もレベルの違いを感じとったのかそそくさと逃げて行った。

「ふう・・・」

一息つき、老人の方を見ると、驚いたといった表情で慶のことを見ていた。

「大丈夫かじいさん？」

「あ、ああわしは大丈夫だが、少年は随分強いんだな」

「まあね」

携帯に目をやると既に8時の門限を5分程過ぎており、覚悟のうえとはいえ親父の事を想像するとため息が出てしまう。

「じゃあな、これからはあんまりこの公園には来ない方がいいぜあんなのばかりいるから」

「待ってくれ！何か、礼をしたいんだが」

「いいよそんなの、悪いけど爺さん貧乏そうだし」

慶がこれから起きる制裁を想像してブルーになりながら歩み始めると、後の方で爺さんが何かをボソボソと口を動かしている。

「明日は・・・家からでない方がいい」

唯一聞き取れた言葉に一瞬歩みが止まる。

「明日は家からでるな。良くない事が起きる。これが礼だ」

「なんだそれ？占いか？生憎そうゆうオカルトなのは信じない主義なんで」

「占いではない。予言・・・いや、真実だ。部屋から一步も動いてはならんぞ！さもないと少年は必ず死ぬ」

死ぬという単語に体が固まり、完全に歩みが止まった。

慶にとって、

「死」とはもつとも恐ろしい言葉だからだ。過去の、自分も死にかけ、そして自分をかばって親友が死んだ。その記憶がどんと蘇ってくる。「簡単に死ぬとかいうな、」

相手の軽はずみな発言に怒り心頭で振り向いたが、そこには先程までの老人の姿は跡形もなく消え去っていた。

「あれ？」

辺りを見渡しても誰もいない。

「もしかして今の爺さん、幽霊？いや、まさかそんな訳が」

無理に笑おうとしているが恐怖に顔が引きつって逆に恐い顔になっ

ている。

「きつと、夢だ・・ハハ」

混乱した頭を抱えながら家路に戻った慶を先程の老人が遙上空から見下ろしている。

「それにしても死ぬには惜しい男だ。このまま成長すればいつか大業を成しえるかもしれない器だ」

老人は少し考えるとおもむろに右腕を前へ突き出した。すると、一本の木製かと思われる杖が現れ、その先端を力無くとぼとぼ歩く慶の方へと向けた。

「オン、アーク」

老人呟きに呼応して杖の先から無色透明のものが飛び出すと、それは慶の胸へと張り付いた。

「ワシの予言は必ず当たる。少年は明日死ぬ。だが資格を与えよう。それをどう使うかは少年次第だ」

空中に浮いている謎の老人の姿は都会の星も瞬かないような明るい夜空だというのに水が蒸発して水蒸気になるように跡形もなく消えていった。

第2話：予言的中

翌日早朝、

慶の部屋では目覚まし時計がけたたましい音を立てながらかれこれ3分程鳴りまくり続けている。

「朝、か・・グハツ!？」

目覚まし時計を切り、起き上がろうとした瞬間全身を激痛が走った。
「き、筋肉痛か・・」

人助けとはいえ門限破りに変わりはなく、鉄拳の変わりに親父にしがかれにしがかれまくった慶の体は全身筋肉痛になり少し動いたただけでも激痛が走るような状態だ。

「クソ、親父にはしがかれるし、助けたホームレスには死ぬとか言われるし昨日は散々だぜ」

慶が制服に着替えようと床をはいつくばりながら移動していると部屋のドアが勢いよく開かれ、にこやかな笑顔でありながらそれとは正反対の怒気に満ちた母親が慶の目の前に立ちはだかった。

「何をやっているの慶？あなたただでさえ出席日数足りなくて留年しそうなんだから早く行きなさい!!」

爽やかな秋晴れの朝から母親に怒鳴り散らされ、朝飯も食わずに家を叩き出された慶は重度の筋肉痛と闘いながら同じ学校の生徒が登校する中を親の文句を垂れながら歩いていった。

「ぜってえ倒すあのクソ両親ども、帰ったらボコす・・」

そんな乱暴な言葉を吐きながらも相手は現役空手師範に母親は母親でかつては女三四郎と呼ばれた程の猛者である。

「いつか倒す、いつか・・・」

考えただけで弱気になってしまった慶の眼の前に昨日の公園が見え始めた。

『明日オマエは死ぬ!!』

まるで気にしてなかった老人の言葉が頭の中をぐるぐると回り始める。

「見てくか」

慶の足はいつもの通学路ではなく公園へと向かっていった。

昨日老人がいた場所、公園の中を少し見て回ったが当たり前には姿は見当たらなかった。

（何ナーバスになってんだか、気にする必要もないか）

学校へと向かい始めた慶だが老人の戯言に振り回され、自分自身に呆れる一方で、この頃から心に引っ掛かる何か黒い不安が取れない感じが何とも気持ち悪かった。

その日の学校も実に平和だった。

いつも通り平穩に最後の授業も終わり、平穩に時間は流れる。

「おい、どうしたんだよ慶？今日いつもより調子悪くない？」

クラスメートの一人に声をかけられた慶の顔は青ざめ気味になっていた。

理由をあえて言葉にするなら、『感』としか言いようはないが確かな気配を感じる。動物が災害を事前に察知して逃げ出すように、慶は何かがくるのを察知している。そして昨日の老人の言葉。

慶は思う。

（オレに近づいて来ているのは『死』だ。）と、

家に、自分の部屋に帰ろうと思い、全校生徒の中で一番早く学校をでた。

いつもの道を通り、あの公園を通り、家はすぐそこにある。

（着いたか、）

その時、耳を裂くようなブレーキ音を聞いて慶の意識はいったん途切れた。

次のシーン。

気がつくと眼の前には地獄絵図が広がっていた。

数台の車がひしゃげて折り重なりあい、人々が苦しみの声を上げている。

（何だコレ・・・）

そしてあることに気付く。

（何も感じない）

不自然な程何も感じなかった。下をふと見たことにより謎は解ける。自分の下に自分が転がっていた。血を流してボロボロになりながら。

一瞬で全てを理解した。

「う、うあああああ！！！」生者の世界で誰にも聞こえない叫び
声を上げた哀れな魂は一陣の風に吹かれて跡形もなく消え去った。

第3話：Destiny Gate

突然、電灯をつけたような眩しさに眼が覚めた。

見回すと、そこは際限なく続くクリーム色一色に染まる空間だった。

自分もクリーム色の椅子に座っている。天井も壁も無く、あると確実に分かるのは床だけであった。

「オレは、死んだのか・・・？」

今いる場所が自分が予想していた死後の世界とあまりにも違うので自分がどうなったのか、本当に死んだのかわからなくなっている。

「アナタは死んだのですよ」

急に真後ろから声がしたので、驚き振り返ると、一人の60代位の老人が立っていた。

グレーがかった長い白髪を後で束ね、同じくグレーの髭を蓄えた老人。

この全てがクリーム色一色の空間に彼だけは黒いスーツを着ていた。

「神谷慶様ですね。私はプフといいます。早速ですが後がつかえておりますので決めて頂きたいと思います。」

「何を、ですか？」

いつの間にか椅子と慶の体がプフの方へと移動していた。

「決まっているではありませんか。アナタは死人だ。死人が選ぶことが出来るのはこれからのアナタの逝き先だけ、でございますよ」

椅子に座ったまま慶は下を俯いている。

「どうかなさいましたか？」

「いや、何でもないです・・・」

慶の脳裏にあったのは自分をかばって死んだ幼なじみの姿だった。
(結局アイツにもらった命たいして生きる前に失くしちまったな)

パチンッ

プフの指を鳴らした音が少し児玉してから、地面がカタカタと徐々に揺れ始め最高潮に達した時、地面から巨大な二枚のそれぞれ黒と白の扉が現れた。

目の前に突如現れた二枚の巨大な扉ビビって椅子からずり落ちた慶にプフが真剣な眼をしながら話し始める。

「さあ、この二枚の扉がそれぞれ白が天国、黒が地国につながっており天国では次の肉体に宿るべく何不自由なくらせ、地国では魂の管理者になるべく厳しい修業を経て死神となることが出来ます。どちらを選択なさいますか？」

プフの話しの間慶はある一つのことを考え込んでいた。

「生き返るってことは出来ないんですか・・・？」

「無理ですな。あなたの体はすでにこの世から消えております。魂が無事でも体が無ければ生き返るなど到底不可能でございます」

「頼みますよ！オレは、オレは死ぬわけにはいかないんだよ！！」

興奮して握みかかってきた慶をプフは冷ややかな眼で見下ろしていた。

「見苦しいですな・・・」

一撃、どうやったのかは不明だが慶でも見切れないスピードで腹を穿たれ、体はクリーム色の床へと倒れ込んだ。

「早めに決めて下さいませ、神谷慶様」

内臓に受けたダメージに慶は悶絶していた。頭と違い、内臓へのダメージは意識がハッキリとしている分その痛みを直に噛み締めなければならぬ。

「はっ、ハッ・・・ハッ」

呼吸することすら困難な倒れ込んだ慶の視線の先に通常サイズの古ぼけた一枚の扉が見えた。（なんだ・・・アレ？）

その扉が薄く開き、中から一人の少年が顔を出し慶を見ながらゆっくりと口を動かした。

「待つてるぜ？少年」

確かにそう呟いたように見えた。

少年はニヤリと笑うと扉の向こうへと戻っていった。

「あの扉が見えるのですか？」プフが驚いた顔で慶を見ている。

返事は困難なので軽く頷いた。プフは失敬と一言いうと慶の胸ポケットを探り始め、慶の身に覚えのない一本の鍵を取り出した。

「雌雄同体の龍のマークが入ったカギ、アナタはスカウトにあったのですね。ならあの扉が見えるのも道理。」

プフが片手を慶にかざすと先程までの内臓の痛みがとれ、同時に体が浮き、元の立ちの体勢へと直してくれた。

「早速説明いたしましょうかあの扉のことを」

またプフの指を鳴らす音が児玉したかと思うと慶とプフはいつの間にかその古ぼけた扉の前へと移動していた。

もしかしたら移動したのは扉の方かもしれないがそれはわからないことだ。

「この扉の名前はDestiny Gateと、そう呼ばれております。この扉はアナタのように力ギを持つ者のみが使用可能で、もし扉の先にある異世界でその雌雄同体の龍の紋章が入った力ギで開けられる扉を見つけることができたなら願いが一つ叶うというものです」

「本当ですか!？」

自然に慶のテンションも上がる。願いが一つ叶うという事は生き返ることも叶うということだ。

「ただし、扉の先にどのような世界が広がっているかはまるでわかりません。獣ばかりの世界や荒廃した何もない世界等、様々でございます」

「それでも、行きます。オレは死ぬわけにはいかないから」

（決意は固い、ようですな。それに、久しい。このようは覇気をもつ魂は）

プフの顔から自然に笑みが零れた。年甲斐もなく胸が高鳴る自分が可笑しかったのだ。

慶の力ギを指差してプフは言った。

「その力ギで扉を開けるのです。そうすれば向こうの世界へと逝けます」

慶が扉を開けると、その先は闇だった。何もない闇だけ。

「神谷様、これをお持ち下さい」

プフから渡されたのは独特の狼のような紋章が入った力ギだ。

「これは・・・？」

「そのうち、時が来たらお教えいたします。では、よい旅を」

プフが一礼すると慶の体は扉へと飲み込まれるように吸い込まれ、扉はバタンツと勢いよく閉まった。

「非常に興味深い少年ですな。ローゼン様」

いつの間にかプフの横にたっているローゼンと呼ばれているのはあの公園で慶に助けてもらった謎の老人だ。

「まあな、久しぶりにワシの眼にかなった奴だからな」

「しかし、Destiny Gateはどんな世界であろうと過酷、前にこの扉から人が帰ってきたのは二百年程前ですか、その前はさらに二百年。はたしてあの少年はどうなるか・・・」

「見物だろ？」

ローゼンは楽しそうに笑う。

その時ローゼンからブーブーとバイブの音がして携帯電話を取り出した。

「これはまたハイテクな物を持っておりますな」

「ああ、便利なんじゃがどこに居てもすぐに捕まっちゃう。休む暇もありやせんよ」

「また呼び出しですか？」

「ちよっくら行ってくる」

「全神にはよろしく言うておいて下さい」
ローゼンは苦笑いするとスッと跡形もなく消えた。

第4話：S p i r i t G e a r

慶は暗い空間を落下し続けていた。

「どこまで落ちんだよー!?」

あのクリーム色の空間で扉に飲み込まれた慶はすぐに落下し始め、かれこれ2分程落下し続けている。

ふと、暗闇しかない下に僅かな光が見えたかと思うと暗い空間を抜け無数の光が瞬く無重力の空間へと飛び出した。

「ここは、宇宙か？」

僅かに光っていたのは宇宙に浮かぶ星であり、慶の眼の前には地球にそっくりな惑星がドンと構えていた。

大陸の形には違いがあるが海や自然。その美しさたるや圧巻だ。

フヨフヨと漂っていた慶の体が勢いよく地球のような惑星をぐるぐると廻るように引つ張られはじめ、段々と惑星に近付いていつている。

そのうち大気圏を突き破り、惑星を廻り続ける慶の体はやがて一筋の光となって一つの大陸へと降り注いだ。

しばらくして気がついた慶が回りを見渡すとそこは都会育ちの慶があまり見ることはないような巨大な木々に囲まれた樹海のような所だった。

起き上がるうとした時、左の手首に身に覚えのないブレスレットがあり、あのプフという男にもらった鍵とD e s t i n y G a t eを開けた時の鍵が取り外し可能なように付けてあった。

（夢じゃなかった・・・）

まだどこかであれば夢だったんだと思った自分が崩れていくのがわかった。

「驚いた・・・人がいたよ」

一人落ち込む慶の後ろからした突然の声に振り向くと、きこり風の一人の男が立っていた。

「どうしたんだこんな所で」

相手からしてみれば当然の質問だ。こんな所に人がいるのだ。驚くのも無理はない。

しかし、慶からしてみれば即答できる質問ではなかった。こんな初対面にいきなり違う世界から来た何て言われても信じるわけがない。

「答えられない事情でもあるのかい？」

少し不信に思いたし、帰ろうとする男を慶は必死に引き止めた。こんな木しかないような所でまた一人になったら命の保証はない。まずは近くの人里に連れていってもらうのが得策だ。

「待ってください！事情は言えないけど、妖しい者じゃないんだ。オレをどこか近くの街とか人がいる所に連れてってくれ！いや、連れてって下さい！お願いします！」

必死に頼み込む慶。

武器も持たずに体一つのその姿に相手も警戒を溶いたようだ。

「いいよ。オレの村に連れてってやるよ。」

「ありがとうございます！！」

「オレの名前はアクヲだ」

そう言ってアクヲは慶に手をさしのべてくれた。

「神谷慶何て珍しい名前だな。漢字ってヤツで書くんだろ？日国の人なのかい？」

「いや、まあはい。多分・・・」

村までの道のりをアクヲとたわいない話して盛り上がった。しばらく歩くと木の大きさも見慣れたサイズになり小鳥もさえずつてゐる。

見渡しても元の世界とあまり変わらない世界。

プフに散々脅かされたけど、この分なら死ぬことはないだろうと慶は軽く油断していた。

「見えてきた。あれがオレの村だ」

山の間にひっそりとある村。

非常にのどかな雰囲気だが、そこには不釣り合いな程美しい教会が建っていた。

「綺麗な教会だろ。君にはまずあの教会で教主様に会ってもらふよ。旅人は教主様に会うのが決まりなんだ」

実際に教会に着くと、遠くから見るとよりかなり大きく高層ビル等を見慣れている慶でも思わず見上げてしまうくらいだ。

「教主さま？」

中は中で壁も床も蒼いクリスタルのようなものでできていて、天井から降り注ぐ光を柔らかく反射している。

奥には黒く巨大な十字架が吊され、その下には白い女性の像があった。

「なんじゃアクヲ？」

奥の扉から一人の老人が現れた。その老人はどこかあの公園であった老人に似ているきがした。

「教主様、旅人です。名前を神谷慶と言うそうです。」

「おお、そうか・ん？」

教主は慶の左手首に着いている鍵を見て驚いた顔をした。

「旅の人、こちらへ来てくれ」

慶は教主に教会の奥の庭に面した小部屋に案内された。

「私の名前はオーシャンだよ。早くだが君のその手首の鍵。それは主神の鍵だな。世界を統べる主神しか持ちえないはずの鍵をどこで手に入れた？」

「それは・・・」

「全てを話して欲しい。どんな奇な話であらうと聞こう。」
慶は全てを話した。

例え信じてもらえなくても誰かに聞いて欲しかった。
少しの沈黙のあとオーシャンが口を開いた。

「なら君は旅に出るのだな？」

「はい」

当然の返事だ。

「なら準備する必要があるな。」

「旅の準備ですか？」

「それもあるが、それだけではない。戦闘の訓練も必要になる。君はこの世界を甘く見ているだろう。太陽の光が降り注ぎ、のどかな世界だと。だが実際はそうではない魔が蔓延る危険な世界だ。武術

の心得があるくらいではすぐに死ぬだろう」

オーシャンは庭に出ると立て掛けてあった一本の剣を手にとった。機械的で白いボディに赤いストライプが入ったそれには剣には必要不可欠の刃の部分がない。

「この剣はこの世の太古からの技と現代化学の融合が織り成す神秘の武器だ。」

「でも、肝心の刃がないじゃないですか」

「この世界にはルーンと呼ばれるエネルギー体が存在する。ルーンは万物に宿り、ルーンが無ければ生物はたちまち死に絶え、どんなに強固な岩も砂塵に帰す。そして人間は長い歴史の中で体内のルーンを操る術を身につけ、それを化学と組み合わせる事でさらに強力な力を手に入れた。それがこの、スピリット・ギア（S・G）だ」

オーシャンの右手の平に黄緑色の風が渦巻き、やがて一つの球体になると左手に持つギアの柄尻にそれを叩き込んだ。

と、同時にギアの等身から黄緑色の刃が吹き出し見事に武器の姿を表した。

「ふん！」

オーシャンの一振りに近くにあった木が真っ二つに引き裂かれた。
「すげえ・・・」

「君にはこれを覚えてもらう。リーシャ、リーシャよ」

扉から一人の女の子が現れた。腰までかかる黒髪が綺麗な女の子。

「なんですか？教主様」

「この少年にS・Gの使い方を教えてやってくれ」

リーシャの青い瞳と眼が会って慶はテレからか思わず眼を反らした。

「わかりました！こっち来て、え〜と名前は？」

「神谷、慶です」

「よろしく、慶くん」

丁度この頃この村の北西にある村が二体の魔獣より潰された。

第5話：魔

日も暮れ始めた頃、村外れの丘で慶は一人落ち込んでいた。

「オレ、才能ねえなあ・・・」

あの後すぐにSGに挑戦した慶だったが補助用のリングを装着してもSGのエネルギー源であるルーンを集束することすらできなかった。

「そうか集束できなかったか」

「はい」

教会の一室でオーシャンは茶菓子を食べながらリーシャの話を聞いていた。

「教主さま、SGも知らない何て彼は本当にただの普通の旅人なんですか？」

「ああそうだ。カズーの森で遭難している所をアクヲに発見されたただの旅人だ」

ごまかそうとするオーシャンだが違和感たつぷりの顔にリーシャが騙されるはずがなかった。

「でも慶君は自分は異世界から来たと言っていましたよ」

「な、あのバカ者簡単に自分の素性を話よって」

「教主さまは彼の言っている事は本当だと思いますか？」

オーシャンは本棚から一冊の古い本を取り出した。表紙には何も書

かれていないが背表紙に小さく

「シュトラー」と、書かれている。

「リーシャも知っているだろう。これはこの世界で最高の預言書と言われるシュトラーの書記だ」

「え！？でも・シュトラーの書記は世界立図書館に保管してあるはず。どうしてここに？」

「それはどうでもいいことだろ？本題はその書記の最後の方に書かれている少年の話だ」

リーシャがパラパラとめくっていくと確かに少年についての記述がある。そこに書かれた内容はまさに慶ことであつた。

「信じるしかあるまい。」

その時、村の方で突然、爆発音が響いた。

「なんだ！？」

リーシャ達が窓から村を見ると二体の魔獣の姿が見える。

「私行つてきます！」

オーシャンが止めるのも聞かずSGを持ってリーシャが向かったのと同じ頃、まだ丘で落ち込んでいた慶が村の方を見ると、日も完全に落ち沢山の星が瞬く夜空を照らすようにあちこちから火の手が上がっている

「何が起こつたんだ！？」

慶が村に戻ると村人達が我先に慶が今来た丘の方へと避難していく。村の中央にある噴水にたどり着いた慶は自分の眼を疑った。これがオーシャンの言っていた魔なのかと理解した。

第6話：絶体絶命

回りを炎が囲む中、体長3メートルはある二体の牛のような魔獣は赤色の一体は噴水に座り、青色の一体は楽しそうに家を壊していた。
「ん〜ん？」

慶の気配を感じたのか青色の魔獣が振り向いた。

（やば・・・！？）

咄嗟に近くのしげみに隠れた慶の心臓は弾けんばかりに音を立てている。

「気のせい、か〜？」

「違うぞ、兄弟！そのしげみの中に誰か隠れたぞ！」

「あ〜そうか〜流石兄者〜！」

巨体を揺らし、一定のリズムで地面を踏み締めながら確実に慶のもとに近付いてくる魔獣。

（クソ、どうする！どうするよオレ！？）

「見イ〜つけた〜」

慶の隠れるしげみに魔獣が手をかけようとした瞬間、一瞬、影が通り過ぎたかと思うと魔獣の右腕から緑色の血が吹き出した。

「誰だおまえ〜」

魔獣の視線の先には怒りを燈した瞳で魔獣を睨みつけるリーシャの姿があった。

「こんなに村を目茶苦茶にして、絶対に許さない！」

「うお〜女だ！女！女！女！」魔獣は自分の腕が切られたことも忘れたように跳ねて喜んでいる。

「切る！」

勢いよく魔獣の懷に飛び込んだリーシャだが華奢なリーシャの体に合わないSGの重さが振り上げるスピードを遅らせる。

「遅いんだよお嬢ちゃん」

体に似合わぬスピード。

噴水に座っていたはずの赤い魔獣の巨大な人差し指がリーシャの脇腹を貫いた。家屋に突っ込んだリーシャはピクリとも動かず、青い魔獣が糸が切れた人形のように力無く気を失うリーシャの体を掴み上げた。

「兄者ゝ女だゝ女はあゝ焼いて喰うと頼った落ちちゃうんだよねゝ」

「おいおい俺達は一応草食なんだぜ！？肉を喰うなんてナンセンス！」

「じゃあゝ食べちゃダメ？」

「いや、せつかくの食材だ。焼いて野菜で包んで食べようきつと旨いぜ兄弟！！」

その一部始終を見ていた慶。

早く助けなければリーシャは確実に死んでしまうだろう。

しかし、助けに出たいのは山々だが自分は余りにも無力だ。

しげみに身を潜める慶の頭には次々に言い訳の言葉が浮かんでは消えていく。

（出ていっても意味がない。無駄死にするだけ、オレには目的があるんだ、こんなところでは死ねない）

己の命を賭しても人を救う事こそ、真の人への第一歩。祖父伝来の信念であり、幼少の神谷慶の目標であった。

「ごめん・・七雄」

決断を下した慶の心は冷静だった。

何かを棄てる覚悟は何かを保つことより軽いと人は言うが、死ぬかもしれないこの状況で、生き返る希望を棄ててまで人を救おうとする慶の覚悟は、保つ事より、遥に重い。

青い魔獣が燃え上がる家屋にリーシャを投げ込もうとした時、慶はリーシャの手から落ちていたSGを拾い、そして、その手の平にルーンを集束していた。

集まったルーンはピンポン玉程の大きさ。リーシャやオーシャンに見せてもらった物より遥劣るがかわりに祖父伝来の信念を込めた。

「いつくぞ〜」

魔獣が振りかぶって投げ込んだのはリーシャではなく自分の右手だった。

「オレの、オレの手が〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！？？」

自分に起こった事態にパニックになった魔獣が発見したのは、肩で息をしながらリーシャを左腕で抱え、右腕には僅かに発動したSGを持った慶の姿だった。

「コ、コロ、コロス〜〜！！」

興奮して振り下ろされまくる魔獣の巨大な拳の爆風と土埃に、逃げてもなくリーシャを安全な場所に隠した慶は再び魔獣の元に現れた。

すでにSGは発動すらしていない。

「コロスコロスコロスコロス」魔獣が残った左手に持った斧を目に見えないスピードで振り下ろした。

あまりの気迫に体がすくみ、尻餅をついていなければ確実に死んでいただろうその斬撃は、空振りしても数メートル先の壁に爪痕を残す威力だ。

この一振りで慶は自分の考えが心底甘かったと痛感した。

SGの発動と自らの武道家に育てられたという経験がこんな状況でも慶の心におごりを生み、先程の逃げるチャンスを棒に振ったのだ。

咄嗟にSGを発動し距離をとった慶に第二撃が襲い掛かる。

まさに危機一髪。

どうにか斧と自分の間にSGを挟み、防ぐことができたが数トンに匹敵する威力を持つ斬撃に慶の体は吹き飛び、血が道のように一直線に飛び散っている。

（にげ、な・・きや、）

僅かに残った意識の中、慶はボロボロの体を引きずり逃げ出した。

5、6歩進んだところで風切り音と共に斧が慶の左肩を切り裂いた。
「ぐああああああー!!」

あお向けに倒れたもはや虫の息の慶にとどめを刺そうと魔獣がその腕を振り上げた瞬間。

（あれ・・？）

気がつくとなあのクリーム色の部屋にいた。

第7話：ウールヴヘンジの鍵

「あれ？オレなんで此处に？」

クリーム色の部屋、中央にはプフがティーカップでお茶を飲みながら英字の新聞を呼んでいる。

「プフ・・さん、オレもしかして又死んだの・・？」

今まさに魔獣の一撃が振り下ろされそうとする瞬間。

それが慶の一番新しい記憶。

「おや、これは神谷慶さま。気付きませんで失礼しました」

新聞を折りたたみ、残ったお茶を一気飲みするとプフの姿はスッと消え慶の横に現れた。

「あなたは死んだ訳ではない。言ったでしょその鍵を使う時が来たら教えると」

プフが指差すは二本の鍵のうち狼の紋様が入った方。

「その鍵の名前はウールヴヘンジの鍵。気高き闘将の鍵。それを使えば一時的に莫大な戦闘力を得ることができます」

「ウールヴヘンジの鍵・・」

最初は気にもしなかったがよくよく見れば不思議雰囲気を持つ鍵だ。まるで生きているような独特の気配を放ち、狼の紋様は今にも動きだしそうな息遣いすら聞こえてくるような、そんな気さへする。

「つーかどうやって使うんですかこの鍵」

「使い方はいたって簡単。ここの鍵穴に差し込んで回すだけ」そう言ってローゼンは慶の左胸、丁度心臓の辺りを突いた。

「こんなとこに鍵穴なんてあるわけないじゃ・・ん!？」

瞬間、慶は又いつのまにか現れたDestiny Gateに飲み込まれるように吸い込まれて行った。

気付くと元のシーンへと戻っていた。魔獣が斧を振り上げ、にやけながら自分を殺そうとする瞬間に、
「死ね」

振り下ろされた斧。

恐らく何の手加減もなく振り下ろされたであろうその斧は村全体に響き渡るような爆音を立てて慶を真っ二つにしたように見えた。

「あれ？」

手応えの違和感に手元を確認するも慶の体はなく、ただざっくりと地面がえぐられているだけ。

「どうやって使うんだっけ・・・？」

フラつきながら数メートル先で立つ慶を魔獣の眼が捉らえた。譫言^{うわごと}をぶつぶつと喋り始めたその姿は誰の眼から見ても危険な状態だったが、人によってはそれを予兆だととらえる人もいる。怪物の目覚めの予兆。

「ブツブツシ〜！」
飛び掛かる魔獣。

「そうだ、こうするんだ・…」カシャン、と音がした。鍵を開ける音。鍵は本来、何かを閉まったりする物。だが物によっては何かを封印する為に使われる。危険な何かを。

魔獣の眼に映った最後の光景は辺りを突如覆った白い霧と鬼の姿。青の魔獣の魂はその余りにも抽象的なイメージを最後にこの世界を旅だった。

瞬殺。

魔獣の体は全て細切れとなり原形を留めない緑の血が滴るだけのただの肉片へかわった。

「兄弟・…」

赤い魔獣が立ち上がった。怒りに震えた拳を振り上げ、地面を一打し立て掛けて置いた布に包まれたSGを取り出した。慶のとは違い青のボディに白いスプライトが入った斧のSG。

「下等なただの食料がオレの弟に何しやがった！」

かなりの怒気を発する赤い魔獣だが鍵を開けると共に慶から吹き出した白い霧のようなものが視界を塞いでいる。

不思議な霧が村全体に充満し、先程まで荒々しく燃えがっていた火が見る見る弱くなり、やがて鎮火した。

「出てきやがれ！！」霧を払うようにSGを振り回すも霧は離れるどころかまとわり付くように魔獣の回りを覆いつくす。

「卑怯だぞ、貴様！出てきて正々堂々オレと闘え！！」

「オマエにそんな事言われる覚えはねえが、やってやるよ」

耳元でそう呟いたかれ、咄嗟にSGを振り回した魔獣だが既に慶の姿はなかった。

満月が照らす中辺りを覆う霧が一点に集束し始め、やがて一つのルーンとして慶の右手へと形を成した。

黄緑ではなく完全な白のルーン。それを集束した慶自身のあれだけ酷かった体の傷も消え、髪には白いラインが入っている。

慶のルーンにより構成されたSGは純白の刃をしていた。

しかしそれには白が持つ清潔感や神聖性はなく、代わりに思わず身震いするような極寒の殺気が満ちていた。

「う、ウールヴヘンジ・・・！？」

慶の姿を見て魔獣の頭に1番最初に浮かんだのは、まだ自分がただの牛だった時の記憶。

牧場主の娘が持っていた絵本に書かれた古代の魔神ウールヴヘンジの姿が慶と重なる。

「何だ、この感覚は・・・」

何もされてないのに魔獣は尻餅をついた。

心臓の鼓動が速くなり、汗が滲み出てくる。

「そつだ、思いだした。この感覚は、」

恐怖・

弟の死から間もなく兄も死んだ。

第8話：はじめの一步

あれからすぐに気絶してしまった慶が眼を覚ますと全てが白い、プフのいるあの空間とはまた別の空間にいた。

起き上がり辺りを見渡すと黒い箱のような物が見えたので近づいてみるとそれは小さめの冷蔵庫であった。

「冷蔵庫・・・？」

開けてみるとカップ型のアイスクリームが一つ置いてあるだけ。

「・・・？」

アイスに手を延ばそうとした時背後にただならぬ気配を感じて振り返ると一人の少年がいた。

「お兄さん、それボクのアイスなんですけど」

「あ、ゴメン」

慶はその顔に見覚えがあった。Destiny Gateから顔を覗かせていた少年にそっくりなのである。

「君どつかで会わなかったか？」

「ボクとアナタは初対面。ところでお兄さん名前は何て言うの？」

「神谷慶だけど」

それを聞くと少年は驚いた顔で慶の顔を眺め始めた。

「ボクの家には誰か迷い込んで来たのかと思ったからお兄さんが神谷慶だったのか」思ったよりイケメンじゃん」

「おまえ、オレのこと知ってんのか？」

「知ってるよ伝言頼まれてる」少年はおもむろに一枚のメモ用紙を取り出した。

「初めまして、そしてようこそこの世界へ神谷慶君。君がこの世界に来ただいたいの理由はローゼンに聞いているよ」

「ローゼン？」

慶は自分の運命を歪めた老人の名前をここで初めて知ることになる。

「あの爺さんローゼンって言うのか」

「続けるよ？君の前にはこれから様々な試練が立ちはだかるだろうけど、君の願いを叶えるためにはそれらを乗り越えなければならぬ。逃げては何も手に入らない。健闘を・・祈る。」

少年は読み終わると一瞬で消えた。

「おい！何処いったんだよ！？」

空間に声が響き渡る。

「あとP・Sヒントを一つプレゼントしよう。君が探す扉には鍵と同じ雌雄同体の紋様が入ってる。あと、せっかく来たんだからこの世界も楽しんでってさ、以上がノア様からの伝言でした」読み手はウラだよ！またね」

朝日で目が覚めると教会のベットのう上だった。

「あ、目が覚めた？」

目が覚めて初めて視界に入ったのは傷だらけのリーシャの姿。それを見てフラッシュバックする昨日の光景。
手に僅かに残る魔獣の血。

急に自分の力が恐くなった。

リーシャを助ける為、村を守る為、沢山の大義名分のために刃を振るったつもりだったが、あの魔獣は人の言葉を話、理解していた。結果。姿形は獣でも、慶の心には人を殺してしまったような罪悪感が残った。

「クソ、アイツ等は死んで当然のはずなのに何でこんなに心が痛いんだ・・・！」

「慶君・・・」

「そんな事を悩んでいる暇はないぞ」

扉にはいつの間にかオーションの姿があった。

「明日には旅に出てもらうことになった」

「そんな急に、慶君はこんなに怪我しているのに」

オーションは視線を慶から離すと口を開いた。

「村人達がな慶の力を恐れてるんだよ。村の男共すら子供のように扱った魔獣をたやすく倒したその力を」

慶はしばらくうつむくと

「わかった」と呟いた。

オーションは慶に服を渡すと部屋からでていき、納得がいかないリーシャもオーションの後を追って部屋を出ていった。

「教主様、慶君を追い出すなんて納得できません。慶君はこの村を救ってくれた恩人ですよ」

「仕方ないことなのだリーシャよ。人とは姿形が違ったり、過ぎた力を持つ者等わずかな違いにうるさい生き物なのだ。このまま慶を村に留めてもいいことはないだろう」

「なら・・・」

リーシャは両手を強く握りしめながら真剣な目でオーシャンを見た。何かを決意した眼で

「私も慶君と一緒にいきます。色々役に立つはずだし」

「何を言っているんだリーシャ!？」

「私が村を代表して慶君に着いていきます!」

リーシャの眼をみたオーシャンはハアと一つため息をついた。（普段はいい子なのに妙くなどこ頑固だからな）

オーシャンを見つめ続けるリーシャ。

「わかったよ・・・」

「ありがとうございます教主様!」

オーシャンの許しを貰ったリーシャは準備をするため自分の部屋に入ってしまった。

「リーシャが旅か、」

オーシャンは昔を思い出していた。

リーシャには両親がいない。

17年前魔獣に襲われた商隊の唯一の生き残りがリーシャであり、オーシャンに保護されてからは孫のように育ててきた。

次の日、早朝。

「ん〜」

昇りかけの朝日に向かって気持ちよさそうに伸びをするリーシャ。後にはまだ元氣のない慶の姿がある。

「なにを落ち込んでいる。慶よオマエの行いは正しかったのだ。この世界で旅をしたいならあの程度のことは沢山ある。夢を叶えたいなら心を強くもて」

「オーシャン・・ああ、わかったよ」

少し立ち直った慶の手をとり握手をした。

「リーシャを、頼んだぞ。それからこんな物騒な世界だがいいところもある。旅を楽しんでこい」

「わかった」

朝日に照らされ、見送りは一人しかいなかったが慶にはそれで充分だった。自分を応援してくれる人がある。一緒に旅をしてくれる人がいる。それが単純にうれしかった。

慶は村の出入口で一度立ち止まると力強く一歩踏み出した。

「はじめの、一歩だ」

今、慶の旅はこれから出会うであろう様々な人や物、世界を巻き込んでその一歩を歩み始めた。

第9話：転落

「おれ、このまま死ぬのかな」

1メートル先も見えない極寒の吹雪の中に慶の体はあった。

その体は雪に埋まり、意識はもうろう、自分の体から生気が抜けていくのがわかる極限の状態。

今にも三途の川も通行してしまうような死の一手手前に慶の意識はあった。

そもそも何故このようなことになったかという時間はかれこれ二時間程前に戻る。

慶とリーシャはオーシャンの薦めでこちら辺で一番栄えているエリアに向かう為ジス村から飛行船に乗船。これが慶にとって不幸の始まりであった。

無事離陸しリーシャと共に眼下に広がる天険アイスナルキス山脈の雄大な大自然を見下ろしている時、慶の耳に不意に

「バキッ」という何とも不幸な音が聞こえたかったと思うとそのまま飛行船から一直線。

結果今の状況にいたる。

「眠い・・・でも寝たら」

風前の灯火のような精神を奮い立たせようとするが人としての命の

リミットはもうすぐ近くまで迫ってきている。

「ラーメン、牛丼、ハンバーグ、せめて死ぬ前に一つくらい喰っておきたかったぜ……ん？」

死に際に食べ物しか想像しないめでたい慶の視界のハジにふと、なにやら黒いものが映ったかと思い、振り向くと何か向こうの方に黒いものが立っているのが見えた。

「なんだアレ？」

よく見ようと目をこすりもう一度見る。

「アレ？」その黒いものは更に大きくなっている。

「アッレ〜？」

再度目をこすり見てみると目の前にその黒いものは立っていた全長2メートルは超えるだろうその顔部分に徐々に目をやる慶。

「ぎ、ぎゃあああああ！！」

目を怪しく光らせる黒いものの顔を見て慶は絶叫の後、パタンと呆気なく気絶してしまった。

第10話：ジャス&グリーン

外は変わらず猛吹雪。

白く冷たい悪魔が山々を覆っている。

慶はある山小屋のベッドの上でスースーと寝息を立てて寝ている。暖炉があり、外と違って暖かさに溢れた空間。

「ん、ん〜？」

やっと慶が目を覚まし起き上がると、暖炉に一人の老人が木をくべている。

「やっと起きたか」

慶が起きたことに気づいた老人は手をはたと近くの椅子に腰を下ろした。

「じいさんがオレを助けてくれたのか？」

「違う」

老人は立てかけておいた猟銃型のSGをとるとメンテナンスを始めた。長年使い込まれた感がする黒いSGだ。

「じゃあ、誰が・・・え？」

その時、部屋のドアを開ける者がいた。慶の視界に初めに入ったのは温かそうなスープ。そして次に入ったのは二足歩行する黒毛の巨大な熊。

「うわあああああ！？コイツはさっきの」

「そいつがお前を助けた恩人だ」

「ガウ」

驚き後ずさりする慶を気にするわけでもなく熊はスープをベッド横の机に置いた。「命の恩人を怖がるとは失礼なやつだな」

熊は専用に造られたような巨大な椅子に座るとジッと慶のことを見ている。

「この熊が？ホントかよじいさん」

「熊じゃないグリーンだ。ついでにワシもじいさんじゃなくてジャスだ覚えとけ」

机に置いてあるスープを手元に寄せ、一口する。

「うめえ・・・」

見た目はただのコンスープにしか見えないがニンニク等の食材がバランスよく配合されたプロの味だ。

「それを作ったのもワシじゃなくてグリーンだ」

「すげえ熊だな。何もんだよいたい」

「グリーンは少しルーンにあてられているんだ。知能が上がり人語も理解するし料理だってする。安心しろ人は襲わん」

「ルーンに当てられるって？」

「オマエ旅人の癖にそんなこともしらないのか!？」

ルーンとは前述のとおり万物に宿るエネルギー体であり、万物はル

ーン無しには体を維持することすら出来ない。
しかしルーンには違う側面もある。

生物は生きていだけでルーンを消費する。

現在、この世界には大量のルーンが溢れている状況にあり、その主な原因としては自然破壊によるルーン消費量の低下が上げられる。消費されずに残ったルーンは地下で液体になり臨界まで溜まると地上へと噴出、これに生物や物質が遭遇した場合あまりの高エネルギーに急激進化。

これに耐えきれず精神に以上をきたした生物を魔物や魔獣と呼ぶのだ。

「へ」

関心片手にスープをかつ食らう。

「こんな常識子供でも知つとるぞ」

ジャスは呆れ顔でSGのメンテナンスを続けていた。
狙いをつけ、何度もサイトの微調整をおこない入念に各所をチェックするその真剣な顔立ちは迫力に満ちている。

「ガウ」

しばらくしてグリーンが時計を指差した。

「おお、もうこんな時間か」

よっこらせと老体を上げるとジャスは何かの準備を始めた。

「オマエはここにいろよボウス」

「どこか行くのか？」

「狩人が外出する理由なんて決まっとるだろ」

猟銃のSGを軽く持ち上げる。

「狩りの時間だ」

「それならオレも連れてってくれ、助けてもらった例になんか手伝うぜ？」

「何言つとるかボウズ。素人がプロの仕事に首突っ込むとえらい目見るぞやめておけ」

「オレも・・・あれ？」

急に慶の足がストンと崩れ落ちた。

「ほら見る、まだダメージがのこっているんだ雪山を舐めるなボウズが。ここで留守番だ」

慶はしぶしぶ引き下がり、ジャスとグリーンは視界最悪の猛吹雪の中へと消えていった。

第11話：勝手にしろ

二時間ほど小屋で休んでいるがジャスとグリーンはいまだに帰ってこなかった。

慶が少し心配して窓から外を覗くも見えるのは雪ばかり。吹雪は止まるところを知らぬ勢いで吹き荒ぶ。

「吹雪、か・・・」

狩人がどんな仕事かは知らない。が、こんな吹雪の中狩りに行くことなんてあるのか？等と考える慶。

ふと見つけた古ぼけたジャスの日記。

普通は少しぐらい躊躇するところを慶は何も考えずにその表紙を開き読み始めた。

最後に書かれたのは二十年前の春先らしい。

それからさらに一眠り。

目が覚めたのは扉をぶち破るかと思うほど力強く叩く音が聞こえたからだった。

眠気眼で扉を開けると、一瞬で眠気は吹き飛んだ。

「ガ、・・・ウ・・・」

ルーンにあてられ、少し緑がかった血を垂らしたグリーンと、その背中に背負われた体中傷だらけ、息を荒くしたジャスの姿が飛び込んできたのだ。

「ど、どうしたんだよじいさん!？」

中まで入るとグリーンは床に倒れ込み、ジャスはボロボロの体を引きずり椅子に座るとすぐさま傷の応急手当を始めた。

傷口に消毒液をぶっかけ荒々しく包帯を巻くと、フラフラの体でジャスとグリーンは再び吹雪の山に行こうとする。

「ちよつと待てよ!そんな怪我してんのにまた行くきか?!」

「当たり前だ・・・」

ジャスの虚ろな目つきで元氣も無く、肩で呼吸するほど苦しそうに息をする様子は、次こそは命が危ないであろう事を予感させるには充分だった。

「待てよ、そこまでしなくちゃならない仕事じゃないだろ、もう休めよじいさん」

「ガキは黙つてろ!」

ジャスの一括に、吹雪の音さえ静まり返ったような気さえした。

「じいさん・・・?」

「・・・行くぞ、グリーン」

その様子を見ると慶はおもむろにコートを着込み、こんな吹雪の中外出しても最低死なないような格好をし始める。

「小僧、ついてくる気か？」

「当たり前だ、今度はオレも行く。こんな風に知り合いに死なれたんじゃ、あの時止めとけばよかった。みたいな後悔しちやいそうでやなんだよね」

ルーンを意識的に傷口に集中させ傷を癒やすグリーンを軽く小突くとジャスは扉を出たところで小さく呟いた。

「ふん、勝手にしろ・・・」

吹雪の中を三つの影が歩いて行く。

第12話：20年前：

「さあ〜み〜」

黒く曇った厚い空からは加減知らずに雪が降り続く。

ジャスとグリーンがここで獲物を待つと言い始めて二時間が立つ。

「わざわざ来なくなっていていいんだ。寒いなら早いとこ帰るんだな」

と、憎まれ口を叩きながらスコープに目を当て、何かを探すように態勢を崩すことなく獲物を待ち続けるジャス。

グリーンは未だ癒えない傷の治療に専念しているようだ。

ジャスの体からも血がポタポタと垂れていたが、これくらい平気だと言って拭こうともしない。

血が、白い雪を染めていった。その真つ赤な血からはジャスが秘めた決意とか覚悟といった断固たるものが見えるきがした。

「今狙ってる獲物って何なんだよ？アンタがそんな重傷を負ってもなお追いかけて続ける獲物っていったい・・・」

「オマエには関係ないことだ」

「ベアヘッド・・・」

慶が発した言葉にジャスは始めるスコープから目を離して慶を見た。
「なんでその名を知っている・・・！？まさか、オマエあの日記を見たのか」

頷く慶にジャスは深く静かな怒りを露わにした。

白の世界でもその顔は赤色に染まっている事がハッキリとわかった。しかし、ジャスはその怒りを爆発させることは無く、静かに飲み込むとまたスコープに目を当てて獲物を探し始めた。

慶が読んだ日記の内容それは今から20年程前に遡る。

アイスナキス山脈のふもとに若かりし日のジャスはいた。

若いといつも年の頃はすでに30を超えた青年から中年へ変わるくらしい時だ。

「早く来いジャス！ちんたらしてると置いてくぞ」

「ちよつ、待つて下さいよ」

この頃のジャスは街の暮らしに嫌気がさし、一念発起して狩人になったばかりペーパーの新米でまだ満足に雪山も歩けないような状態だった。

「はやいですよ、ダイさん」

「その歳で狩人になりたいなんていつてる甘ちゃんに狩人の厳しさを一から教えてやってるんだから文句垂れずについて来い！」

しばらく歩くとダイはそつと手を上げてジャスに合図を送った。それを見てジャスは立ち止まるとそつと身を雪の中に潜めた。

「ダイさん、なんかいんですか？」

じりじりと匍匐前進して猟銃型のSGを構えるダイに近づく。

「ああ、白毛キツネがいる」

「白毛キツネなんて久しぶりの大物じゃないですか！肉は旨いし、毛は高い。今日はご馳走ですね」

「集中できんからちよつと黙ってる！」

ダイは獲物に気づかれないよう身を潜めながらじっとチャンスをうかがっている。

しばらくの沈黙。

他人ことなのにやたら心臓の音がデカく聞こえる。

（こっちがドキドキしちまうよ）

何も音のない世界で生唾を一つ飲み込む音がしたかと思うと銃声が響き渡った。

弾は空気を裂きながら獲物に近づき、着弾の寸前でバツとルーンの網に変わると傷つけることなく獲物を見事に捕らえた。

「よし、」

ダイと小屋に帰る途中ジャスはハッとため息をついた。

「どうしたため息なんかついて」

「今日も何も狩れなかったし、オレもダイさんみたいにクマとか狩りたいなと思ってまして」

白毛キツネを抱えるダイとは違って一年も修行しているのにジャスは今日1日獲物を捕ることができずにいた。

それどころか今までまともに獲物を捕ったことすらない。

そんな自分が不甲斐なくて出たため息だった。

「クマを狩りたいなんて一年くらい修行したからって一人前になったつもりか。狩人ってのは根気のいる仕事だ。そんなことでいちいち折れてるならサッサと街に帰った方がいいぞ」

「ダイさん、」

それから少しして春がそこまで来ている頃、ジャスは一人で狩りに出ていた。

静かに歩き、気配を消し、自然と一つになる。

人間がいることを山の動物に知られてはならない。

そうしてジャスは獲物を見つけた。

開けた谷間で回りに視界を遮る物が無い絶好の狩猟ポイント。

すぐさまSGを構えるジャスだがスコープから見た獲物を見て落胆した。

せっかく初の大物だったと思った獲物である頼白グマは親子連れだったのだ。

「クソ、なんでこんな季節に子供連れなんだよ！」

普通、頼白グマの繁殖期は春から夏で今の季節に子供がいること自体が珍しいのだ。

スコープから頼白グマの親子を見つめながら必死にジャスは考えていた。

狩人の掟によりいかなる場合に置いても親子連れは狩ってはならない。

それが山に生き、生かされる狩人の掟である。

しかしこの時のジャスには、目先の獲物に目がくらみ一生後悔する選択をすることとなる。

パンツ パンツ

と二回銃声がした。

少し危ない笑顔を浮かべながら谷間を駆け下りるジャス。

今まさに自分が仕留めた獲物の前に立つと苦しげに息をする獲物と訳も分からずいきなり倒れた親にしがみつく小熊。

トドメ。

を刺そうとした時だ。

不吉に揺れ始める大地。地面が裂け、自分と獲物の間に巨大な地割れを作ると、次に地割れの中から現れたのは途方もない量のルーンだった。

「う、うわっ、うわああああ！」

ルーンを浴びるまいと必死に逃げるジャス。

ある程度おさまった後、ジャスが戻ってみると、きっと我が子の為に死力を尽くしたのだろう親グマが子グマを守るように覆い被さり死んでいた。

子グマは辛うじて生きていたがルーンを僅かに感染し、急激な進化に体はボロボロ。

無惨な光景だった。

「オレのせいだ・・・オレが欲にかられて撃たなければこの親子は助

かったの・・・」

ジャスはその場に膝をつく、もう生きていない親グマに向かって何回も土下座した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

ジャスはせめてもの報いに親グマの墓を作ると、一匹残った子グマを連れて自らの小屋へと帰った。

それから数年後

子グマは傷が治ったあと山に帰り、ジャスはまだ狩人を続けていた。

その頃から妙な事が起きるようになった。

純白の毛を持つ魔獣に村が襲われるようになり、討伐に乗り出した狩人も返り討ちにされた。ジャスの師匠であるダイも殺され。

次はオレの番だとジャスが準備をしていると一匹の頬白グマが現れたのだ。

「オマエ、あの時の・・・」

それは紛れもなくあの子グマであった。

頬白グマはジャスについて来いと言わんばかりの態度をとるとジャスをかつて親グマを殺した忌まわしき谷間へと導き、墓を見せた。

「掘り返されてる、」

墓は掘り返され、中に死体はなかった。変わりにあったのは生え落ちた黒い毛と、新たに生えた時落ちたであろう純白の白い毛。

言われずとも、全てがわかった。

今、村々を襲っている魔獣の正体。それはあの時死んだと思われていた親グマ。

ルーンの手で魔獣へと進化した親グマだ。

頼白グマは地面に汚い字で文字を書き始めた。

討伐を手伝ってやる。と

「だがあれはオマエの親だぞ！？」

関係ない。あれはもうただの魔獣。人にも獣にも山にも脅威でしかない。

「だが、オマエの親をあんな風にしちまったのはオレだ、」

自然界では死なんてものはいつも隣にいるもの。どこで誰に殺されようと相手を怨んではいけない相手も生きる為にやっているのだから。

頼白グマの目は真剣だった。

「わかった、元はといえば全てオレの責任。ヤツはオレが狩る。」

この頼白グマはグリーンと名付けられる。

後にベアヘッドと名付けられた親グマは驚異的な生命力、回復力に

加え、圧倒的な殺傷能力により長い年月がたった今でも生き続けている。

その過程で村は無くなり、狩人もジャス以外全て殺された。

第13話：私ヲ殺せ。

「来た・・・」

ジャスの一言に辺りに緊張が走る。

匍匐前進で少し頭を出すと100メートル程先を歩く白いものが慶にも見えた。

これだけ視界が悪いにもかかわらず、その体が発する純白の光は雪の白さを凌駕し、その体はただ白くあった。

昼間に西の山でベアヘッド見たということは、次は必ず南の山に現れる。

長年の経験からそれが分かっていたからジャスは辛抱強く待ち続けたのだ。

自然、体に力が入る。あの日から既に20年近くたち、今までたった3人で繰り返してきた殺し合いだが、この瞬間に馴れる事はない。

「いいか、ワシが撃つたらそく逃げるんだ。いいな」

「なんで、だよ？」

「死ぬからだよ」

「死ぬってそいつで撃てば終わりなんじゃないのかよ？」

「ヤツの生命力は既に生物の規格を超えておる。体に弾丸を撃ち込まれた位では死なん。ヤツを仕留めるには体のどこかにあるルーンの結晶を破壊しなければならぬが、当たるかどうか分からない」
ジャスの指がトリガーにかかる。

「故に撃つたら逃げるんだ。もしヤツのルーン結晶を破壊できてなければ、次はコッチがやられる」

「だからさつきあんな怪我して帰ってきたのか」

「20年間何度繰り返しても当たった試しがないからな。逃げる準備だけしとけ」

ジャスはスコープを覗き込み、静かに敵を捉えた。

今まで頭や腹、心臓に銃弾をぶち込んでも死ぬことはなかった化け物を殺すべく狙いがつけられた。

「これを見舞って、死ななかつたらもう、お手上げだな」

自分で自分に皮肉を言つとSGの弾を全て捨て、赤いデンジャーマークの入った弾を取り出す。

甲式狙撃散弾

見た目は通常弾と同じだが高密度のルーンを内包し、目標1メートル前でルーンを放出。

外装を破壊、拡散した破片にルーンが取り付き直径3センチの散弾になるといふなんとも恐ろしい弾丸である。

ジャスは弾を込めると再びベアヘッドに狙いをつける。

グリーンはジャスを包み込むように支え、銃の安定性を上げる。

パンツ

風の音に消え入りそうな乾いた破裂音が山に小さく兎玉した。

破裂音に振り向いたベアヘッドの体を無数の散弾が襲う。肉をえぐり、千切り、吹き飛ばされ、体からルーンに汚染された黄緑色の血を吹き出す、その巨大が雪原の白い絨毯に倒れることはなかった。

「逃げる!!!」

ジャスの声に振り向き走り始めた慶だが、時は既に遅かった。ベアヘッドは再生の為にのた打つ体をものともせずに跳ね上がると3人の前へと降り立った。

「クソッ・・・！腹括れ小僧！」

威圧感に立ちすくむ慶の横をグリーンが風を切りながら通過するとベアヘッドと直接組み合う。

「そのままおさえとけよ！」

ジャスは手早く弾を入れ替えると、均衡する両者へと銃口を向け発射。ベアヘッドの脇腹に命中するもそれをものともしない。

素早く次弾を装填するジャス。再びスコープを覗き込んだ時、グリーの巨体が投げ飛ばされる姿を見てとつさに回避したが、グリーン諸共新雪を巻き上げて雪に埋もれてしまった。

「じいさんー！」

一瞬、人の心配をした慶だが、すぐに自分の置かれた状況の危険さに気がつく。

ゴクツと生唾を飲み込む慶。

自分が出会った中でも最大級の獣と目が合い続けるといって、最大級のピンチに体は動くことができなかった。

硬直したかのように動かず、頭の中は様々な危機回避パターンを提案するも、唐突に出会ったその危機的状況に答えを出せずにいる。

（どうするどうするどうするどうするよ・・・！？）

と、思考する慶をよそにベアヘッドのカギ爪はゆっくり振り上がり、高速で振り下ろされる。

不意に訪れた一撃だが目を合わせていた分反応できた。

そこからは今までの静寂が嘘だったかのような戦闘が始まる。

高速で何往復もする爪に体に似合わない軽快なフットワークで次々に攻撃を繰り返す。

「うおおおお！」

負けじとSGを発動する。

戦闘に集中していて慶は気づいてないが、発動したSGは初めて発動した時のようなナイフ程度の物ではなく、しっかりと剣と呼べるだけの刃を備えた物へとなっていた。

爪と剣が重くぶつかり合う音が何度も兎玉する。

均衡した実力にお互いに決め手を欠いている状況に思われた時、不意に、戦いの中ベアヘッドが笑った様に見えた。

不気味な感じに慶が一步引いた途端ベアヘッドは腕をしならせ爪で思い切り降り積もった雪を巻き上げる。

「クソッ、前が見えねえ」

降り続ける雪に巻き上げられた雪が合わさって何も見えない目くらましを喰らった慶が再び視界を確保した時そこにベアヘッドの姿はない。

「どこだ、どこ行きやがった!？」

辺りを見回すが姿を確認することはできない。

「小僧、下だ!」

咄嗟に右へ跳んだが、雪中からベアヘッドの黒光りする爪が突き出し慶の左足をえぐる。

「痛え・・・、雪の中に隠れるなんて、これが雪上の戦闘か!」

慶を追撃しようとするベアヘッドだが雪から這い出たジャスが頭を撃ち抜き、右のストレートを紙一重でかわし、懷に潜入したグリーンが全力のアップラーをお見舞いする。

「やったか!？」

グリンの一撃はその爪が顎から頭の天辺を貫通し、首を引っこ抜く程の威力を見せたが慶の目にはさっきのように不気味な笑みを浮かべたように見えた。

次のシーン

グリーンが血しぶきを上げて吹き飛び、離れていたジャスも突如切り

裂かれたように血を出すとその場に倒れた。

「何故だ・・・カハツ、何故ワシは倒れている？何故ワシは血を出しているのだ！？」

その理由を知っている者はこの場にベアヘッドと、間近でそれを見た慶だけが、慶は自分がその目で見た事を信じる事が出来なかった。

「なんだ今のは・・・！？」

あの瞬間、ベアヘッドが笑ったように見えた時、両の爪が薄く光ったかと思うとそれを一閃、二閃と振り抜き爪から飛び出た淡い光の刃はジャスとグリーンを血に染めたのだ。

「これはルーンのか？こんな物初めて見るぞ」

弱るジャスはベアヘッドの笑った顔を見てあることに気づく。

「まさか、今までアイツは本気じゃなかったのか？ワシ達は20年間ベアヘッドに遊ばれてたのか・・・?!」

真実にどうしようもない怒りが込み上げ震えるジャス。

この20年間殺し合ってきた相手に手加減されていた事実。自分達は殺さなければならぬ筈の、終生の宿敵に生かされていた。

そう考えただけで目の前は怒りに染まった。

「うあああああ！！」

狙いも定めず、叫びながらベアヘッドに突っ込んでいくジャス。

「避けるじいさん！！」

極限の怒りが熟練の狩人を盲目にし、自分に迫り来る追撃の一刀を見えなくした。

そうして倒れたジャスを見て次に我を忘れたのは慶だった。

「デメエ、絶対に、殺す・・！」
カシャン

鍵を開ける音と共に慶の体を駆け巡る力の渦は髪に白のメッシュを入れるとSGに殺しの力を宿らせた。

「うおおおらあー!!」

悪い足場にも関わらず、一蹴りでベアヘッドまでの距離を限りなくゼロにするとそこから神速の連撃を放つも、咄嗟に慶の危険性を察知したベアヘッドはそれをルーンの膜のようなもので防ぐと距離をとる。

その顔はこの殺し合いが始まって初めての真剣な表情をしていた。

「そんな顔できんなら・・何で今まで真剣にやり合わなかったんだよ!？」

「ヒマツブシ・・」

その一言に再び怒り爆発の慶はさっきよりも更に早い速度で距離を詰め、その剣を振るう。

あまりのスピードについてこれなかったのかベアヘッドは先程に比べると不自然に動かなかった。

一閃決まり、二閃決まり、三閃四閃とその体が血で染まるまで斬り続け、遂にベアヘッドを瀕死に追い込むと、黄緑色をした拳程のルーンの結晶が額にメリ出し、倒れたその頭のルーン結晶にSGの刃先を向ける。

「オレはオマエを殺せない。オマエを殺すのはじいさんとグリンの役目だ」

ジャスを起こそうと振り向いた時、ベアヘッドの口から言葉が漏れた。

「ハヤク私ヲ殺せ。モウジブンノ意識をタモテナイ。もう破壊にイキルノハヤだ。ワタシが暴走しないウチに早く、コロセ。ワタシを・」

「え？」

言葉を疑い、目をベアヘッドにやろうとした瞬間、傷からしたたる血を撒き散らしながら再び襲いくるベアヘッド。

「チイツ、」

慶が腰のSGを引き抜こうとした時だった、

パンッ

と、ひとつ銃声がするとベアヘッドのルーン結晶は碎かれ、長く続いた殺し合いは呆気なくその幕を閉じたのだった。

第14話：憧れ、恐れ、敬意

死にたい

その一言だけが、薄れゆく意識の中いつも頭の奥底にあった。

ルーン汚染の結果ベアヘッドと呼ばれるようになった彼女は生きながらに地獄を旅する者だった。

ルーンによる強制進化。

それに伴い押さえきれなくなる破壊衝動。そして魔獣として生き始め、自分が何をしてきたのか、

進化し、良くなった頭は全てを理解していたが自分を止める術を知らなかった。

飽くことなく暴れ続ける自分自身に恐怖を抱き、いつか自分を殺してくれるものが現れることをただひたすらに祈り、待ち焦がれた。

そして今、長い月日を経てやっと自分に安らぎの瞬間が訪れた。

「ハア・ハア、ハア、ハア、」

息を荒げるジャスはSGを構えたまま動こうとはしなかったが、やがてグリーンに身を任せるように倒れた。

「やった、か・・・」

二人の下に慶が駆け寄ってくる。

「大丈夫か2人とも？」

「ああ、この寒さで血が凍ったおかげで何とかな。元々深い傷でもなかったようだ」

「そうか、よかった」

ジャスは傷口を抑えながら立ち上がると覚束無い足取りで倒れるベアヘッドの下に歩み寄った。

「ベアヘッド・・・」

ルーン結晶を破壊され自己治癒能力が無くなったのか、いつの間にか赤い血を流すベアヘッドは息絶え絶えに何かを喋ろうとする。

「アリ、ガト・・・ウ」

その言われる覚えのない一言に、むしろ罵られても仕方のないと思っていたジャスの目からは涙が止まらなかった。

「すまない、全ては、全ての責任はワシにある。すまない。すまなかったあ、」

20年前のたった一度の過ちを、自分の愚かさを語り、謝り続けるジャスを見てベアヘッドは少し笑い、グリーンに向かって長く低く唸り声を上げるとベアヘッドはその生涯に幕を下ろしたのだった。

おおよその生命が与えられる幸せを感じる事は出来なかった。酷く苦しい一生に狂いそうな程嘆いた日もあった。自らの有り様に何度も死にたくなつた。

でも、それでも私は、この自分自身の生き様を後悔した日はない。私は気高き頼白グマだ。

どんな理不尽な事が起ころうと甘んじて受け入れよう。それが自然の摂理であり、真理。

誰かは私を可哀相だと言うかもしれないがそんな事はない。私は宝を守ることが出来た。子供を殺さずにすんだ。

だが、代わりにたくさんの生命を殺した。だから地獄だろうとなんだろうと罰は受ける。それが私の選択だ。

「承知いたしましたベアヘッド・いや、マーレ様。」

あのクリーム色の空間。

そこにはプフと人化したベアヘッド改め、マーレの姿があった。

「でも、死後の世界でまさか人になるとは思いませんでした」

マーレは自分の変貌ぶりにただただ啞然としていた。

「ここは精神の世界。望めばどのような姿にでもなれますよ。アナタ様が人の姿をとるのは恐らくは憧れや恐れ、敬意からきたものでしょう」

「憧れや恐れ、敬意・・・」
その時マーレの脳裏にあったのはいつも息子の横にいたジャスの姿だった。

「息子と一緒にいる彼の事が憧れであり、私の運命を狂わせたのが恐れであり、息子を生かしてくれた事への敬意か・・・」

感慨にふけるマーレ。

「そろそろお時間です」

「わかりました」

マーレはふとどこまでもある天井仰ぎ見た。

「元気にやるんだよ、グリーン」

途端にマーレの姿は木の葉のように黒く大きな扉へと吸い込まれ、扉は重く、すすり泣くような音を出して閉じたのであった。

頬白グマのマーレ

地国世界地獄地区行き決定。

第15話：早く行け！

「おい、いいのかよあのまままで？」

「ああ、いいんだよあれで」

僅かに晴れ間が指した先には、何の処理もされていないそのままのベアヘッドの死体が横たわっていた。

ルーンによる再生能力を失い、息絶えた後には戦いで負った生傷から溢れ出した血が、そこだけ赤く染めていた。

「やっぱり墓くらい造ってやろうぜ」

「うるさい小僧だな。あのもまでいいと言っとなるだろうが」

自然に生き、自然に死んだ動物の亡骸に墓はない。

他の生物の餌になり、骨になっても大地に埋もれその糧になる。

それが普通なのだ。

ベアヘッドには最後までい普通の動物としての死を全うして欲しい。とのグリーンたつての頼みでもある。

「だが狩人ってヤツは殺す為だけに狩りに出る事を固く禁じられた人間だからコイツを貰ってきた」

ジャスは包みから三本の立派な爪を取り出した。

「すげえ……」

黒く、鈍く光るそれは、剣ではないが剣気迫るといった感じが、ただの爪なのにそれは妙な迫力に包まれていた。

「オマエにも一本やろう」

触るのもためらう剛爪をヒョイと持ち上げて投げ渡すジャス。

投げられた方はビックリして思わず落としそうになってしまう。

「渡すならもつと普通に渡せー!!」

「それくらい受け取れハナタレが」

改めて爪を見回す。

「ホントに貰っていいのかよオレなんかが」

「いいんだよ。曲がりなりにもオマエのお陰なんだからな、それにあんなおっかないヤツだった但至少でもホントのヤツを知ってるヤツに貰ってもらいたいからな」

困り顔でグリンを見るとガウと一回吠えられた。

それが慶には貰ってほしいと言っているように聞こえた。

謎の空間

ベアヘッド。

強敵であつた。

その身体能力は勿論の事、特筆すべき再生能力にカマイタチの様な物を発生させる技。

どれもが神谷慶にとっては驚異だったがそのどれもを弾き返す神谷慶自身の能力。

神谷慶がこの世界に来てから演じた命をかけた戦いは僅か数日間です。二回。

これが元の世界の生活ではどれほど有り得ない事か、そしてその二回を両方とも生き抜いた事によって神谷慶が得た経験値がどれほどの物が自分自身でもわかっていないようだ。

今後もその足取りを追い、随時まとめて行きたいと思う。

著クライン・アルバーノン

「クライン、また神谷慶を見ていたのか？」

椅子に座り、レポートを書く青い髪のカラインと呼ばれる男。声をかけたのは赤い髪をした中学生くらいの少年。

「ああ、ホッパー。いや、彼は実に面白い男ですよ。ローゼンが資格を与えたのも頷ける」

ふーんと興味なさげにホッパーはどこからか椅子を持ち出し、クラインの近くに座った。

「クラインがそんな風にしてんの久々に見たよ。その、神谷慶とか

言うのそんなに面白い？」

「はい、非常に興味深く、人間の醜い馴れ合いの部分がよく出ています。そう、とても、ね」

クラインはガツと立ち上がると天井を仰ぐようにして眼を瞑る。

「ああ、人間とはどうしてこんなにも愚かしく、醜いのか、馴れ合いを好み、使えない者を切り捨てるのを良しとしないその考え！まったく…」

クラインの掲げる手からナイフが飛び出すとレポートに書かれた顔写真に突き刺さった。

「殺したくなってしまう…」

「ヒュー、クラインコワイ」

山小屋

「もう行くか」

「うん、色々世話になった。ありがとう。」

「まあ気にすんな。こっちも世話になったしな」

「それから…これ大事にするぜ」

慶は腰に下げられた爪の飾りを触りながら礼をいった。

「これからの旅気をつけるんだぞ。その、なんだ、諦めたら諦めた

でオレの弟子になっても構わんがな」

照れながらのジャスを見て一番笑ってたのはグリーン。何が可笑しいか！？と赤らめながら怒鳴るジャスを見て慶も笑らってしまった。

「もう早く行け！」

ドンと背中を押されて慶は走り始めた。

「また来るからな！…ん？」

大きく手を振るジャスとグリンの横にベアヘッドが見えた気がしたが、

「気のせいだろう！」

世界有数の大山脈天険アイスナルキスを後にし、慶は一路アリアに向かう。

第15話：早く行け！（後書き）

いきなりリーシャの出番が無くなり失敗したと思っています。

第16話：スリ兼オオカミ少年

「ホントに心配したんだからね！」

「すみません！！」

潤んだ眼をしたリーシャに慶は鹿威しのようになだただ頭を下げ続けていた。

ここはアリアとアイスナルキス山脈の丁度中間点にある街、クレージュタウン。

慶が飛行船から落ちた後、折れてなくなっている手摺りを見てすぐさま状況を読み込んだリーシャは、パニックのまま飛行船を止めようと機関室に侵入したりそのまま飛び降りようとしたり、ついには補給地点であるこの街で強制下船。

アイスナルキス山脈に単身乗り込もうとした時、下山して来た慶に偶然出会わなければ、ケータイもないこの世界。

一生会うこともなかったかもしれない。

「まあ機嫌なおしてさ、街見物と行こうぜ」

「知らない！慶一人で行けば！？人がこんなに心配してたのに私の苦勞を聞いて笑うなんてヒドい！」

機関室で大騒ぎに加え、強制途中下船なんて聞いた日には腹筋がよじ切れる程笑った事を若干後悔していた慶。

「さよつてらっしやい見てらっしやい！世にも珍しい喋るネコだよ」

妙な呼び込みにまだ腹を立てているリーシャを連れて見に行つて見ると、一匹の黒猫が鳥籠に入れられ怯えた表情で周りに群がる人々を威嚇している。

「さあこの黒猫、ただのネコじゃない！なんと魔物でもないのに人の言葉を喋るんだ！」

「ホントなのかよー！？」

誰が言ったかわからないヤジにネコの持ち主の商人は待つてましたと言わんばかりのニヤケ顔で籠に手をつ突っ込むと、嫌がるネコを捕まえ強制的にその目を見開かせる。

「これが証拠だ。どっちの目も変色していないだろ？」

それを見ていてリーシャは突然振り向くと慶の袖を引っ張って群集を抜け、目的もないのに歩きだした。

去り際、そのネコがかすれ声で一言、タスケテと言ったのが妙に頭に残った。

「どうしたんだよリーシャ？」

質問にリーシャは静かな怒りを込めて答える。

「あれ、獣化病の人だよ」

「獣化病？」

獣化病

ルーンによる病気のひとつと考えられているが原因は全く不明。発症すると全身が毛に覆われ、尻尾、耳、顔、体の各部位の順番で次々と獣化し始め、最短2ヶ月で完全な獣になってしまい、それに伴い知能も獣じみてくる大病だ。

「あのネコ、目が変色してオッドアイになってなかった。つまり、獣化病でネコになっちゃった人。それなのにあんな見せ物みたいに、耐えられないの」

「ならあんな商人ボコツて止めさせればいいじゃん」

「獣化病患者は大概奴隷登録を受けてるから助けても無駄なの。すぐに見つけられて持ち主に返されちゃう」

リーシャの赤らんだ頬に、涙ぐんだ目、慶とのケンカでそうになっているのか、さっきのネコでそうになっているのか、

改めて辺りを見渡して見る。

華やかなメインストリートに、それを飾る多種多様な屋台。レンガ造りのオシャレな家が立ち並ぶ賑やかな街だが、所々でホームレスのような人々を見る。

しかも、子供から大人、老人まで分け隔てなく。

しばらく歩いて高い場所から見ると一目瞭然だった。

繁栄しているのはメインストリートに、それに隣接する数力所だけ。それ以外は黒く色分けされたような雰囲気包まれている。

「ここも前は大きくないけどいい街だったのにな…」

移り行く物に思いを馳せ、過ぎ去った過去を懐かしむ。

そんな慶達の耳にまた妙な物が聞こえてきた。

「大変だ！ウエアウルフの大群が向かって来てるぞー！」

その少年は同じ事を何回も叫びながら街中を走り回っていた。

「ウエアウルフ！？」

「どうしたんだよりーシャ？」

「あの子が言ってる事がホントなら大変な事になる…。数によるけどウエアウルフは集団で行動する魔物で、かなり頭がいいから大群に襲われたらかなり危険だわ」

だが、周りの人間達の反応は冷ややかな一言。

チラツと見るのはまだいい方。大多数の人々が街の危機に見もせず、無視。

少年だけがその場で浮いていた。

「なんだこのヤツらは？自分達の街が危険だって言うのに反応なしかよ」

「うわ〜ん」

走り抜けてきた少年は慶に抱きつくと目を潤ませ、誰もが助けたいくなるような全開の顔で助けを請うてきた。

「旅の人、僕等の街を助けて！このままじゃ、このままじゃこの街は…うわ〜ん」

「わかったボウズ任せとけ！オレ達が助けてやるからボウズは街中走り回ってこの事を伝えるんだいいな？」

「うん、わかった！」

走っていく少年を見送り、気合い充填走り出そうとする慶達を呼び止める声がする。

「アンタ達、持ち物改めた方がいいよ」

その青年風の男は意味ありげに笑っている。

「今そんな事してる暇は…、あ〜！！」

答えながら腰の辺りを弄って異変に気づいた。

腰のベルトに挿した大切なSGが無くなっているのだ。

「慶君まさか何処かにおとしたんじゃ」

顔が青ざめる慶に男は続けてこう告げた。

「違うよ、さっきいたろ？ ウェアウルフがどうか叫んでたガキが。アイツがスつてったのさ」

「そんな、何故!？」

「アイツの名前はルチアーナ。ここら辺で有名なスリ兼狼少年さ」

第17話：計画

世の中に逃げてる途中に待てと言われて待つ人間がどれほどいるか、答えは限り無く0に近い。

街中で繰り広げられるラン&チエイス。

街をどれくらい熟知しているかなんてものはある程度の実力を持つ追いかける側からはあまり関係の無いもの。

ようは見失わなければ万事OK。

「待てー!!」

「うるせー、いい加減諦めろ！」

「誰かー、そいつ捕まえてくれ!!」

「へっへーこの街にオレを捕まえようなんて奴はいないのさー! 捕まえたきゃ自分でやってみろー!!」

「ねえ、慶君、私のSGで捕まえようか？」

「ここまでやったら、自分で捕まえなきゃ気がすまねー!! 絶対オレが殺す!!」

「こ、殺すって主旨変わってるよ…」

「それでも食らっとけ!!」

ルチアーナが蹴り倒した樽の群がゴロンゴロンと転がってくる。

「そんなん、こうしてくれるわ!!」

と、調子に乗って大きく振りかぶり、先頭のタルな打撃を加えるとバキンと音がしてタルが凹み、慶の腕が妙な音を出した。

「痛っ、で～～～!!」

「アホ～、アホ～、超人にでもなっ たつもりかドまぬけが～!!」

「殺、殺…ぶつ殺しじゃ～!!」

こんな感じでクレージュタウンを所狭しと駆け回る慶達。

どれくらい走ったかは本人達にもわからなが、こういう物の終わりは結構呆気なかったり、

その車は突然現れた。いや、ルチアーナが勝手によそ見しながら飛び出しただけだが。「コラガキ!死にてえのか!？」

当然の決まり文句が飛び出す、ルチアーナ本人は腰を抜かして歩道に座り込んでいた所を慶に掴み上げられそれどころではないようだ。

「やっと捕まえた。さあ、オレのSGを返せ!」

「嫌に決まってるんだろ。アホかオマエは!まあ知性に欠けた顔つきしてるもんなあ、親が可哀想だぜ」

「ほ、ほお…口は達者だな？覚悟は出来てんだろうな」

ギヤーギヤーうるさく騒ぐ二人に文句を言うタイミングを外したと
いうか、無視される運転手。

そんな危うくルチアーナを轢きかけた運転手が運転していた車の後
部座席から紳士姿の男が降りてきた。

「あれ、市長のタリスさんじゃないか？」

それを見た人々は今まで立ち止まろうとしなかったのに、立ち止
まる所か拍手までし始める始末。

「オマエ、チームの次男坊のルチアーナじゃないか？」

「オマエ、タリス…！」

今までのルチアーナとの雰囲気の変わりように慶もタリスの方を見
る。

「ハッ、チームが死んでからどこに行っただかと思っただらこんな所で
こそ泥とは、流石あのクズの息子！落ちたというか、まあお似合い
だな」

「父さんはクズじゃない！」

「あのボロ雑巾のように死んだ男のどこがクズじゃないのかな？早
く貧民街に帰れクズ。私の清潔な街が汚れる」

「く、クソツ、クソツ……！！いつかオマエなんか……」

「オマエなんか……なんだね？その続きに来る言葉は、え？言ってるん」

「帰る……！！」

ルチアーナは慶の手を振り払い慶にSGを渡すと貧民街の方へと歩いていった。

「面白い光景だな。ゴミが自分でゴミ箱に帰って行くぞ」

酷い言葉だ。

人をゴミだと言うのだ。しかし、それ以上に慶達を困惑させたのは周りの人々の反応だ。

自らの街の長が人をゴミだと言ったのを咎めるどころか、それを聞いて笑っているのだ。

異常だと感じた。

慶は慶なりに色々な人に会ってきたつもりだが、今日の前にいる彼らはそのどれとも違った。

彼らには悪意がないのだ。

純真に人が人を虐げているのが面白いようだった。

良識ある悪人より、ずっと質が悪い。

なにせ自分達の行為の意味が、考えの異常さが分からないのだから。

「笑うな!!」

慶の怒鳴り声に一瞬静まり返ったが、しばらくヒソヒソと話すやがてタリスは去り、人々も何事もなく歩き始める。

「慶君、」

「ここにいるのは人じゃない」

そんな慶の姿を見て古ぼけた格好をした老人が近づいてきた。「アナタ方、ルチアーナ坊ちゃんのお知り合いですか？」

「アナタは？」

まだ行き場のない怒りに震える慶の代わりにミーシャが聞くと老人はペコリと一つお辞儀をした。

「私、坊ちゃんの父上、ターム様の元執事だったクシナと申します」

老人の話ではこの街の前市長こそがルチアーナの父親、タームだったということだ。

かつのこの街は飛行船の補給地点としてそれなりに繁栄した街だったらしい。

しかし、都会出の副市長タリスにはタームの政策は不服でしかった。

街をもつと発展させ、こんなこじんまりした街ではなく都会にも負けないような街にしようと画策するタリスと、今のまま平凡に暮らしていこうするターム。

真っ向から対立した意見。

どうにかタームを追放したいタリスだが順当に市長選挙で勝とうとしても、タームの支持率は圧倒的。とても勝ち目はない。

そこでタリスはタームのスカンダルをでっち上げ、役人に賄賂を送り、今の地位を買ったのだった。

市長になったタリスの政策により確かに街は豊かになったが、殆どの町人は貧民街に押し込められ、タリスに協力した僅かな人々と都会からやってきた成金だけが裕福にくらす街へと変貌してしまったのだ。

貧民街へ追いやられたタームは病気を患い、死に、ルチアーナも今のように盗みで生きるようになっていったそうだ。

「坊ちゃんはまだ闇の中にいるように誰にも心を開かずに生きています。旅の方達、もしかたルチアーナ坊ちゃんに会う事があれば是非話だけでも聞いてやってください。人と話し、信頼する事を思い出せばきっと昔のような良き子に戻ってくれるハズです。お願いします」

慶達がクシナの話の聞いている頃、

貧民街、ジャンクショップ裏。

ルチアーナが歩いていると男達の話す声が聞こえてきた。

「では明日、夕刻にメインストリート及び市長宅を襲撃する。準備に抜かりはないだろうな？」

「当たり前だ。こっちはあの市長共々この街をぶっ壊す為にアンタらと組む前から準備してきたんだ」

「なら結構。」

身を隠して二人の男の企みを聞いていたルチアーナ。そつと、見てみると衝撃的なものが視線の先にあった。

蛇が剣に巻きつきいたタトウ。

それはジックス盗賊団の証。

つまり、明日の夕刻、この街は盗賊団に襲われると言う事だ。

しかし、ルチアーナにとっては盗賊団を手引きしている男の方が衝撃的だった。

「兄貴…！？」

そこにいたのは前市長チームの長男でルチアーナの兄、シュトルフ。その姿は慶達にルチアーナの事を教えた青年そのままだった。

自分の兄が盗賊と連んで街を襲う！？そんな、バカな。

と、頭をめぐる考えの波が落ち着く前に駆け出したルチアーナ。

「貴様、待て！！」

止まる訳なく駆け抜ける。

「クソッ、逃げ足の早いガキだ。早く殺さねば。計画が漏れる」

「大丈夫だよ。アイツはこの街で有名なほら吹きだ。誰もアイツの言う事なんて信用しやしない」

「しかし万が一と言う場合が、」

「アンタも心配性だな。大丈夫さ。計画は上手くいく。」

「もし、さっきのガキのせいで計画に支障が出たら貴様にも死んで貰うからな」

盗賊団の男はナイフを取り出すと少し離れた場所で寝ている浮浪者の額にそれを投げ刺した。

「わかった…か？」

頭から血を吹きながら先程と変わらぬ姿勢で痙攣する浮浪者。やがて動きはなくなり、死が訪れるのに時間はかからなかった。

脅しじゃない、本気だとアピールする為に適当に人を殺す。

適当に命を奪う、

下衆め、

と内心思いながら同時に頼もしくも感じた。
人を殺す事に抵抗がまるでない。

きつと、計画は上手くいく。

男を送り出すとシュトルフはルチアーナが駆け抜けていった先を目を細くしていつまでも見ていた。

世界最高予言者の日記より一部抜粋したもの。（前書き）

世界立図書館に掲示されている物を一部印刷したものである。

世界最高予言者の日記より一部抜粋したもの。

私とその男に出会ったのは、確か35歳の誕生日を酒場で人知れず独りで祝っていた時だった。

田舎が嫌で何か才能があるだろうと故郷を飛び出し放浪するように諸国を周り、なんの才能もないのだと気付いた時にはもう30歳を越えていた。

この日は誕生日と言う事もあつてか珍しく私の落書きのような絵が売れたこともあり、少々機嫌が良かったのだ。

その男は私に話しかけてきた時には既にベロンベロンに酔っていたようだった。酒瓶を片手に私の隣に座ってきたのだ。

男は持った酒を少し飲むと、アンタみたいに不幸な人は初めて見ると言ってきた。

更に続けて才能に恵まれないとも言ってきた。

余計なお世話だ。

と、言つてやつた。

なんで初対面のヤツに言われなければならない？ケンカでも売っているのか？

と、思いながらも内心、

当たっている。オレは見ただけで何の才能もないと分かるほどそんなに貧相な顔をしているのかと落ち込んだものだ。

男は落ち込んだ私を見て話を続けた。

私にはどうやら何事もそこそこ才能があるらしい。

だが決して一番になれるような才能はない。いわゆる器用貧乏を絵に書いたような男だと言われた。

それが不幸なのだと男は言った。

何事もまあまあこなせるが、特出したものがない。だから熱中出来るものが無く、ある程度までいくと飽きてしまう為、私のような奴はつまらん人生を送るか、自分の限界を計り間違えてどん底に落ちるしかないらしい。

男は笑って言うていたが、聞かされた方は落ち込むに決まっている。

そんな私を見て気の毒に思ったのか男は私に面白い話をしてやると言った。

男はこの世界が誕生してから現在に至るまで、更には未来の事までを事細かに話し始めたのだ。突拍子もなく奇天烈な嘘かホントか判らないような話しが小一時間程続くと、男は最後にある少年の話を始めた。

それまでが大まかな歴史を辿るものだった為、少し違和感を覚えたが話を聞いた。

その少年は異世界からやってきて、この世界を滅ぼすらしい。

そこまで聞いて私は酒に吞まれて酔い潰れてしまった。

目を覚ますと男の姿は無く、店主に聞いても知らないと言われた。

私は記憶力にはいささか自信があったので男に聞いた話を書記にまとめると、それを早速古い本屋に売りに出した。

内容はおふざけだが面白さを買われてなかなか良い値段で引き取ってもらえる事になったのでその金で故郷に帰ろうと思う。
所詮は平凡が似合う男だと理解したからだ。

それにしてもあのローゼンと言う男、彼の話には何か形容しがたい説得力があった。

あの男にはまた会ってみたいものだ。

ガリレイ・シュトラの日記より抜粋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9502c/>

Destiny Gate

2010年10月15日22時03分発行